

文化的アイデンティティの試練  
—アイルランドと沖縄の経験\*—

米 須 興 文

本日の講義のテーマは、掲げられた講義題目にありますように、アイルランドと沖縄の文化的アイデンティティにまつわる経験についてであります。多少こじつけになるかも知れませんが、ジョン・モンタギューの言葉を借りていえば、「巨大な隣人との居心地の悪い関係」を経験したアイルランドと沖縄の共通点を探っていくことになります。

と申しましても、アイルランドと沖縄の植民地体験という観点から両者を比較しようというわけではありません。そのような観点から両者を見ることも、それなりの意味はありますが、私は両者の文化的プロセスにおける類似性に注目しながら話を進めてまいりたいと思います。また、支配－被支配の植民地体験の視点から考えますと、市民的自由の問題や人権の問題が出てくるわけですが、このような問題も今日の話題の中ではマイナーな位置を占めるにすぎないことを理解していただきたいと思います。

アイルランドと沖縄の文化的な類似性と申しましても、両者の間に homology, つまり系統的な相同関係があるわけではありません。両者は、互いに地球の裏側にある余所者同士であります。しかし、偶然ながら不思議に思えるくらい共通点があります。

その一つは、非常に感性と想像力が豊かな土地柄であるということです。アイルランドも沖縄も民話や神話や伝説が豊富にある土地で、両者とも民俗学の宝庫として知られております。しかも、民話や伝説の想像力の世界が人々の住む生活環境や自然環境と密接に結びついていて、森や川はいうに及ばず、村々の一木一草に至るまで霊気が漂っているといつて言い過ぎではありません。想像力や感性は歌謡や芸能にも発揮されて、今日でも日々新しい民謡が作られて人々に歌われる、共同体的アメニティーの豊かな点でも共通しています。両者とも、美的感性と自然に感応する想像力が生き生きとしている文化なのです。

いま一つの共通点は、両者とも閉鎖性と開放性という一見矛盾した特質をもつ共同体社会だということです。非常に結束の固い同胞意識の強い土地柄であるにもかかわらず、外来者に対してはおおらかに受け入れて同化してしまうような開放的な民族性であります。

まず、わが沖縄は「村意識」が非常に強い土地柄です。村や集落にはさまざまな年中行事やお祭りがあって人々の結束を固めます。そこには外部の人間がなかなか入りこめない雰囲気があります。しかし、入ってしまえば、全然外へ弾き出されることはない。顕著な歴史的な例としては、琉球王国時代に渡来した閩人36姓というのがあります。当時、いろいろな技術をもった中国人が琉球王朝のために働いていましたが、彼らは那覇市の久米町にコロニーを作って住んでいました。しかし、彼らはいつの間にか同化されて、その末裔は氏名も沖縄風に改めて沖縄社会に完全に溶けこんでしまい、今では見分けもつきません。現代では本土からの移住者が後を絶たず、沖縄の日本復帰後移住してきた人たちは4万とも5万ともいわれますが、彼らは

---

\*このエッセイは、2000年1月29日に愛知淑徳大学の太野光子教授と太野ゼミの大学院生を迎えて沖縄国際大学で行った講演の原稿に若干の加筆を施したものである。

各地に溶け込んで沖縄県民になって地元の人々と変わらない生活をしています。このように外来者を取り込んで同化してしまう文化的な特質はアイルランドと共通するものだと思います。

アイルランド人はケルト民族です。ケルト民族は、ご存じのように、強固な統一国家をつくらず小共同体が方々に分散して生活することを好む民族です。アイルランドへ移動してきたゴイデル部族も無数のトゥア (tuath, tuatha) と称する小王国単位で分散的に居住していました。このような国は、侵略者に対して弱いのは当然です。古くは、北欧のデイン人の侵入を許しました。ダブリンは、そのデイン人が開いた町でした。12世紀のアングロ・ノルマンは、わずか数百人の軍勢でアイルランドを席卷しました。

しかし、一つ一つのトゥアは極めて強固な共同体で、度重なる外敵の侵入にもめげずアイルランド文化と民族は滅びることはありませんでした。12世紀にアイルランドの支配者となったアングロ・ノルマン人もこの共同体をノルマン風に改造することはできず、逆にアイルランド社会に順応し、やがてアイルランド化してしまいます。そして、アイルランド人から“old foreigners” (旧外国人) と呼ばれるようになりました。

## 2

先ほどから頻りに「アングロ・ノルマン」(Anglo-Normans) という呼称を使っていますが、この呼称の背景をちょっと説明いたしましょう。

英国はアングロ・サクソン人が建てた国ですが、1066年に対岸のフランスからノルマン人が侵入してきます。いわゆるノルマンジー公ウィリアムのイギリス侵入です。この時以後、英国文化は、宮廷文化はいうに及ばず、法律、学問、言語を含めて全面的に強くフランスの影響を受け、新しい時代に入りました。このようにアングロ・サクソンとフランス系のノルマンが融合したのがアングロ・ノルマンです。

さて、ウィリアムが英国を征服してから一世紀経って、アングロ・ノルマンの英国がほぼ固まったころ、隣国アイルランドに侵入する絶好の機会がやってきました。そのきっかけは、ダブリンの北にあるレインスターの領主デアリットのお粗末な不倫沙汰でした。デアリットがブレフネ小王国に侵入した際、領主オルークの妻ダヴォーギルを拉致して寝取ったのです。妻を奪われたオルークは、他の小王国の盟友と謀ってデアリットを攻め、レインスターから追い出してしまいます。領地を追われたデアリットは、英国へ渡り助けを英国王に求めます。1169年のことです。そこで、英国王ヘンリー二世は、ペンブローク伯爵 (通称ストロング・ボウ) に命じてレインスターを取り返してやります。ところが、ペンブローク伯爵とその軍勢はそのままアイルランドに居座ってしまい、更に二年後に、ヘンリー王がアイルランドへやって来て、全土を掌握して支配下に置きます。この時からアイルランドは英国の植民地になってしまったわけです。

英国からやって来たアングロ・ノルマンは、アイルランド各地の小王国に領主として君臨しますが、間もなく領民との間にかつてのアイルランド貴族が維持していたような良好な関係を

持つようになり、その関係はやがていわゆるアングロ・ノルマンのケルト化へ発展します。彼らは、アイルランド人と結婚し、アイルランドの民族衣装をまとい、ゲール語をしゃべるようになり、領主の中には名前をゲール語風に改める者まで現れました。

文化的アイデンティティの観点から特に注目すべきケルト化現象は、アングロ・ノルマン貴族が館で吟誦詩人を養うようになったことです。アイルランドの吟誦詩人は、字義通りの文人で、仕える貴族の諸記録や系図などを管理して直接伝統の維持にかかわるかたわら、詩歌を吟じ物語を誦して共同体の想像力や感性の世界を豊かにする役割を果たしていました。つまり、彼らはアイルランドの文化的伝統の主たる担い手だったのです。アングロ・ノルマン貴族が館で吟誦詩人を養うアイルランドの慣習に馴染んだということは、文化的な意味で彼らのケルト化が行きつくところまで行ったということです。見ようによっては、アイルランドは武力によって英国人に支配されたが、文化的に支配者を逆に支配した、といえなくもありません。

さすがに英国政府は危機感を募らせ、この風潮に歯止めをかけようと、有名な「キルケニー法」(1367年)を制定して領地没収などの威嚇によってアングロ・ノルマン貴族を牽制しましたが、この法は概ね無視されてあまり効果が上がりませんでした。こうしてアングロ・ノルマン貴族は、英本国では“degenerate English”(墮落した英国人)と蔑まれるようになりました。

### 3

しかし、アングロ・ノルマン貴族とアイルランド農民との蜜月は、17世紀になって運命的な危機を迎えます。

アングロ・ノルマン人は元来カトリックですから、カトリックのアイルランド人との間に信仰上の対立はありませんでした。したがって文化的にも融合し易かったといえます。ところが、英本国がプロテスタント化しますと事情は変わってきます。17世紀に起きた2度の戦争でアイルランドは敗北し、カトリックの貴族たちは大陸へ逃亡しました。代わって新来のプロテスタントが土地を接收し、新たな支配者となります。そうすると、英国人とアイルランド人との関係は、アングロ・ノルマン時代とは全く様が変わりました。

文化的な見地からの重大な出来事は、貴族の庇護のもとに文化活動をしていた吟誦詩人たちが路頭に放り出されたことです。それまでアイルランドの神話や伝説を後代に伝え、新しい文学を創造してゲール語文化の伝統を維持してきた詩人たちの離散により、主流文化としてのゲール語文学の伝統はここに断絶の憂き目を見ることになったのです。

貴族の庇護を失った詩人たちは農民たちの間に散っていき、「野外学校」の教師として農村の子供たちに読み書きを教えるようになりました。こうして、ゲール語は支配階級の言語としての地位を失い、貧しい庶民の言語となってしまったのです。また、ゲール語文学も農民の間ではそばそと余命を保つ仕儀となりました。

ゲール語とゲール語文学を保護してきたカトリックの支配体制を壊滅させた英国は、更にア

イルランド文化への圧力を強めます。即ち、「(カトリック) 刑罰法」によって宗教的ならびに市民的権利の侵害を行う一方、教育のメディアを英語と定め、学校でのゲール語の使用を禁止しました。カトリックの学童が学校でゲール語をしゃべると *bata scoir* と呼ばれる罰札を首に懸けられました。この屈辱的な言語規制については、注 No. 1にある<sup>(1)</sup> ジョン・モンタギューの詩「移植された舌 (=言葉)」に生々しく描かれています。英語の発音を間違える度に教師から罰札に印を入れられる学童は、英語風に変えられた自分の名前にさえ舌がもつれるのですが、数十年たって、今度は学童の孫たちが失われた母国語の発音に舌がもつれるのです。

プロテスタントがアイルランドを支配するようになって、アイルランドにアングロ・アイリッシュ文化がうまれます。英国とアイルランドという二つの文化的背景をもつアングロ・アイリッシュは、特に文筆の分野で目覚ましい働きをしました。18世紀英国文壇の巨匠たちの多くがアングロ・アイリッシュです。皆さんご存じの『ガリヴァー旅行記』の作者、ジョナサン・スウィフトは、その一人です。その他、アイルランドの笑いを作品に持ち込んだ劇作家 G・ファーカー、18世紀英国の代表的なエッセイストで劇作家の R・スティール卿、小説家の L・スターンや O・ゴールドスミス、喜劇で鳴らした R・シェリダン、更にヨーロッパの知的伝統に燦然と輝く哲学者 G・パークリーと政治思想家 E・パーク等、数え立てればキリがありません。

アングロ・アイリッシュはプロテスタントですから、カトリックのアイリッシュとは意識が違いますが、英国人とも微妙に意識のずれがあります。スウィフトは、はっきりと反英、親アイルランドの立場をとり、英国の圧政に強く抗議しました。しかし、18世紀の大方のアングロ・アイリッシュの眼はやはりロンドンに向いており、19世紀末から20世紀初頭にかけての、いわゆる「復古派」のアングロ・アイリッシュの民族主義や伝統主義とは異質の思想的基盤に立つものでした。彼らの教養はあくまで英国流のそれであり、彼らの思想はヨーロッパの啓蒙思想や合理主義を背景とするもので、アイルランドの土着やアイデンティティに根ざしたものではありませんでした。

#### 4

19世紀になりますと、アイデンティティの問題に影響を及ぼしたさまざまな政治的な動きがありますが、時間的な制約もあり、大部分を端折っていかなくてはなりません。しかし、この世紀半ばの目立つ存在である「若きアイルランド」グループの活動を無視するわけにはいきません。このグループは過激な政治活動を行ったグループで、トマス・デイヴィスに指導されていました。このグループが発行していた「ザ・ネイション」という機関紙は熱烈な愛国詩を掲載してアイルランド人の反英気分を煽っていました。この機関紙に寄せたトマス・デイヴィスの詩をちょっと覗いてみましょう<sup>(2)</sup>。注の No. 2をご覧ください。ここには熱烈な愛国心が実に素朴な表現でうたわれています。この機関紙には、ジェイムス・マンガンのような優れた詩人も寄稿していましたが、大部分の寄稿者の作品は文学的に拙劣な作品で、1世代後の「アイリッシュ・ルネサンス」の詩人たちの作品に比べるべくもありませんでした。たとえば、同

じ愛国的な追悼詩でも、W・B・イエイツの「1916年の復活祭」<sup>(3)</sup>と前出のデイヴィスの詩を比べれば、その差は歴然としています。ともあれ、「ザ・ネイション」の寄稿者たちが堂々とアイルランドを歌ったことは、アイルランド人に大きな勇気を与えました。

しかし、「ザ・ネイション」の幼稚な詩やトマス・デイヴィスの政治思想に違和感をもった文学者たちは、新しいアイルランドの文学とアイデンティティを求めて、文学と思想の「非デイヴィス化」を叫ぶようになります。彼らは、過激なデイヴィス流の政治運動ではアイルランドの自由は達成できないと感じていました。彼らは、精神的自立こそ英国の巨大な力を撥ね退けるエネルギーであると信じていました。つまり、反英闘争としては政治闘争よりも文化闘争のほうがより有効であるということです。

こういう考え方には二つの流れがありました。その一つは、ダグラス・ハイドの主唱するゲール語復活運動です。ハイドは、実はプロテスタントのアングロ・アイリッシュでした。しかし、彼は熱烈な民族主義者で、独学でゲール語をマスターし、ゲール語で詩を書けるまでになりました。この人が大学に入学したとき18歳でしたが、勉強室にアイルランドに関する専門書が110冊、古文書が18点もあったといわれます。

ハイドは1892年に「アイルランド文学協会」の会長に就任しましたが、その時の就任演説、「アイルランドを非英語化する必要性」は歴史的な文書となりました。この頃のアイルランドは庶民の間で英語化が著しく、慣用語としてのゲール語の消滅も時間の問題となっていました。この事態を憂慮したハイドは、この演説の中で消滅の危機に瀕しているゲール語を蘇生させることは焦眉の急務であると説きました<sup>(4)</sup>。

「われわれが挙って英語化してしまえば、われわれが独立した民族であることを世界に認めてもらふ最良の手掛かりを易々と手放すことになる。」と主張し、

「わが国を非英語化するために、われわれは[ゲール]語の衰退に直ちに歯止めを掛けなければならない。」と訴えました。更に、このままだとアイルランド人は、

「模倣的な国民となり、自発的な能力を失って他者のものを受け入れるのに汲々とする西ヨーロッパ版の日本人に成り下がるだろう。」

と、日本人の模倣性を引き合いに出して日本人としては甚だ迷惑な表現で訴えています。

1893年に、ハイドは、ゲール語を蘇生させることを目的とした「ゲール語連盟」を組織し、その会長におさまりました。ハイドの母国語復活運動は国民的な支持を獲得し、全国に600もの支部ができるほどでした。

しかし、ハイドの運動は、結果的には殆ど見るべき結果を生みませんでした。アイルランドの英語化はどんどん進行して、もうとどめようもありませんでした。

こうなってしまった原因は、実は1845年に始まりその後数年にわたって暴威を振るった「ポテト大飢饉」にあるのです。

19世紀のアイルランドでは、主食はポテトが用いられていました。そのポテトが胴枯れ病におかされ始めた1845年からアイルランドは猛烈的な飢饉に陥り、人々がばたばた死んでいきました。また、食料不足からくる栄養失調や赤痢、コレラ等の疫病のため多くの命が失われました。

餓死や疫病を免れた人々は、生き延びるために故国を捨てて大ブリテン島や北米へ続々と移住していきました。アイルランドの人口は著しく減少して、1881年の国勢調査では、当初の800万から500万に落ちていたといわれます。

飢饉を乗り越えた人たちも災害の再来を恐れて土地離れの志向を強め、アメリカ等の英語圏への移住によって生活の確保を目指すようになり、アイルランドで英語熱が高まりました。親たちは、子供たちのために家庭で英語を慣用し始めました。普通、外国語の慣用については家庭内で最も抵抗があると思われるのですが、大飢饉以後のアイルランドでは家庭内で広範に英語の慣用が進むという異常な現象が起きました。1861年の国勢調査では、10歳までの児童でゲール語しか話せないのは2パーセントに満たない状況になっていました。更に、1900年までには、ゲール語を慣用語とする人口は、総人口の15パーセントに落ち込んでいました。今日ではゲール語を慣用語とする人口は、約1パーセントで、主に西海岸とアラン群島に居住する農漁民であるとのこと。

このようにして、大飢饉後わずか半世紀でアイルランドはほぼ全面的に英語化してしまったのです。まことに凄まじい文化現象といわなくてはなりません。この事実は、国民的な巨大な意識の流れの中で起きる文化的プロセスに対して母国語復活運動のような人工的操作が全く無力であることを示しています。ハイドの努力が徒労に終わったのにいささか哀れをおぼえます。

ハイドの立場に真向から対立したのはW・B・イエイツでした。イエイツは、ハイドの例の演説に対する反論を『ユナイテッド・アイアランド』紙に投稿しました。その中でイエイツは、今や息絶えんとしているゲール語を蘇生させる努力が無駄なこと、アイルランドの心を表現しているのはアイルランドの神話や伝説の人物たちであって、それを表現している言葉ではないこと、したがってその表現は英語で充分であることを主張しました<sup>(5)</sup>。アイルランドの神話や伝説に表されているアイルランドの精神を英語で想像力ゆたかに表現することによってアイルランドの文化的アイデンティティを確立することが可能だとイエイツは主張したのです。ゲール語を失えばアイルランドの精神も失うというハイドとは対照的な主張であったことが分かります。

## 5

話を更に進める前に、イエイツにとってアイルランドの民族精神とは何か、それはどのように確立されるのか、ということの説明しておく必要があると思います。

イエイツにとって、アイルランドの民族精神とは、貧しい農民が民話や伝説の形で太古から伝えてきた想像力の世界に息づいている民族の心のことです。イエイツは、アイルランドの農民が代々伝えてきた民話と伝説の宝庫を、アイルランドの詩的想像力の証であると同時に文化的アイデンティティの確立への可能性を示すものと考えたのです。1893年には、イエイツは幼少期を過ごし生涯愛したスライゴー地方で採集した伝説や昔話に自分のエッセイを交えながら纏めた1冊を『ケルトの薄明』(*The Celtic Twilight*)と銘打って世に問うています。

こうした民話や伝説の世界は、イエイツにとって単なる作り物や観念の世界ではなく、また民衆の生活の記録や写しなどでもありません。それは、民衆の生活そのものの延長であり、民衆の創造的エネルギーの発露であるとイエイツは主張しました。『ナショナル・オブザーヴァー』紙に寄せたダグラス・ハイドの『炉端にて』に対する書評で、イエイツはハイドが収集し英訳したアイルランド民話について次のように言っています。

「言うまでもなくこのような物語は“人生の論評”などではなく、むしろ延長なのであり、したがってヘンリク・イプセンの社会劇、いわゆる“向上の書”のあの最後の場面よりはるかにホメロスに近似しているのだ。それは実存なのであり、観念などではない。これらの物語の前では、われわれの住むサロンの世界など、まるで陽の当たらないみすぼらしい場所にみえてしまうのである。」<sup>(6)</sup>

この文章は、イエイツがアイルランド農民の伝える民話・伝説の世界に、かつてマッシュウ・アーノルドが文学を定義して言った「人生の論評」(“a criticism of life”)と異なる世界を見ており、また、当時ヨーロッパを風靡していたイプセン流のドラマが描く「人生の断面」(“tranche de vie”)とも異なる世界を見ていることを示しています。イエイツは、アイルランドの民話・伝説を代々伝えてきた農村の田園文化の中にアイルランドの文化的アイデンティティの根拠を求めていたのです。

イエイツがアイルランドの文化的アイデンティティの根拠を、古くから伝わる民話・伝説の中に息づくケルト性に求め、キリスト教文化に求めなかったのは注目に値します。それは、イエイツがアングロ・アイリッシュ系のプロテスタントだったこととも関係がありますが、より大きな理由は、民衆の大多数がカトリックであるアイルランドでは英国との関係の中で宗教の問題は常に政治の問題であり、純粋に文化的な問題としてアイルランド問題を捉えていたイエイツにとってカトリシズムは避けざるをえなかったということです。

しかし、イエイツが古い民話・伝説の世界に脈打つケルト性にこだわった最も大きな理由は、アイルランドの想像力の世界こそ、イギリスやその他の如何なる文化にも劣らない精神的な豊かさを示すものと信じたからでした。イエイツは、物質的な進歩に目が眩み、精神的な貧困を招いている現代の都市文明に幻滅を感じていました。そして、現代文明の最先端に行くイギリスに対抗して、美しい自然と豊かな精神風土の上に築かれた田園文化である「ロマンティック・エイレ」を再建することこそ、アイルランド文化を絶滅から救うだけでなく、支配者に対して、また世界に対して自らの文化的・民族的アイデンティティを明確に示す道だと信じていたのです。

イエイツは、この理想を貫くために、グレゴリー夫人やエドワード・マーティンらと組んで演劇運動を展開しました。ダブリンに「アビー劇場」を建て、アイルランド作家による劇を上演しました。イエイツの運動は、後に「アイリッシュ・ルネサンス」と呼ばれる文学運動となり、この運動の中からイエイツ自身、20世紀英文学を代表する作家に成長し、更にシングやオケイシイらのアイルランド文学の巨匠たちを輩出させます。

しかし、イエイツの文学運動は必ずしも国民の支持を受けたわけではありませんでした。ア



イルランド人一般の心情は、依然として政治的な反英主義に傾いており、イエイツの夢想した「ロマンティック・エイレ」は現実離れがしていました。加えて、アビー劇場の上演作品に対しても民衆は不満でした。シングとオケイシイの作品に登場するイルランド人の描き方をめぐって観衆の批判が高まり、アビー劇場で2度にわたって暴動が起きました。優れた芸術家の描く世界が、熱狂的な愛国心に凝り固まった民衆の気持ちと相容れなかったのです。しかし、彼らの芸術はグローバルな高い評価を受け、イルランドはヨーロッパで無視できない文学大国となりました。この功績は政治的なナショナリストたちの功績を遙かに凌ぐものでした。しかし、イルランド史の権威、F. S. L. ライオンズ教授が指摘するように、イエイツとその仲間たちの文学運動は、イルランド民衆の願望に逆らう性質をもつものであり、彼らの理想は民衆に背かれ、はかなく敗れ去ったといえるでしょう。ライオンズ教授はその大著『飢饉以後のイルランド』で、イエイツらの功績と民衆との関係を「二つの文化の戦争」と規定して次のように述べています。

「彼らの達成したことの素晴らしさは何物によっても損なわれるものではないが、それを現実のものにした人たちは、結局二つの文化の争いでの敗者となったのである。」<sup>(7)</sup>

イエイツとハイドの文化運動を比べてみると、極めて対照的で、かつ皮肉な結果を生んでいることが分かります。イエイツの場合、民衆の意識から遊離していたにも関わらず、その運動の成果は宗主国を圧倒するような国際的な評価を獲得し、イルランド文学のアイデンティティを確立しました。これに対して、ハイドの場合、国民の熱烈な支持を得たにもかかわらず、ゲール語復活の目的を達成するに至りませんでした。ハイドの努力に対して心情的には熱烈な支持をもって応えたイルランドの民衆は、実際の行動においてはゲール語を捨てて英語に走り、ハイドの期待を裏切ったのです。P・L・ヘンリー教授がいう、「19世紀の半ばから逃亡が時代のキーワードになった。土地からの逃亡、故郷からの逃亡、母国語からの逃亡である」<sup>(8)</sup>はイルランドのアイデンティティにまつわる当時の真実を捉えています。

## 6

さて、話題を沖縄に移すことにしましょう。沖縄が文化的に、また言語的に日本の一部であることは、学問的には一応定説となっていると思いますが、本土の人々の意識の中では、おおむね異国または異文化として捉えられていると思います。沖縄でも日本本土のことを「ヤマト」と呼び、ある種の違和感をもっていることは事実です。どうしてこのようなギャップができたかといいますと、一つには別々の歴史を歩んだということ、また一つには沖縄と本土の間に国民の一体感を作り出す歴史的大事件の同時体験が乏しいという事実があると思います。沖縄は琉球王国として数百年も独自の道を歩んでいました。中国、朝鮮、ルソン、ジャワ、マラッカ、シヤム等の東洋諸国と広範な貿易を営んでいました。特に中国とは親密な外交関係にあり、中国の朝廷が琉球を朝鮮に次ぐ宮中序列第2の地位をもって遇し、琉球も中国朝廷から国王の冊封を進んで受けていたという事実があります。

また、歴史体験の面では、琉球が1609年に薩摩の支配下に置かれてからも、徳川の幕藩体制には組みこまれず、対外的にも独立国として存続しました。したがって、幕末や明治の大変動にも直接参加せず、琉球人はあくまでカヤの外でした。また、太平洋戦争では日本で唯一の地上戦の戦場となり、その後27年間米国の軍事占領下に置られました。こうした歴史の共有や民族的体験の共有の欠如が同族意識を阻害する要因となり、いわゆるアイデンティティの問題にも深くかかわっていることは否定できません。

しかし、沖縄のアイデンティティが大きな問題となったのは、明治政府による琉球処分以後です。明治政府は、日本の他の藩にやや後れて1879年に琉球を「沖縄県」として正式に日本の版図に組み入れました。そして、さっそく県民に対していわゆる皇民化教育を実施しました。つまり、沖縄県民を文化的に、また思想的に本土人と同一化しようという教育です。言語については、廃藩置県の翌年には早くも「会話伝習所」を設立して本格的な言語行政に乗り出しました。その後、県庁の学務課を通じて他県ではみられなかった強制的な標準語励行を実施しました。学校では、アイルランドの場合と同様、「方言札」と呼ばれる罰札を設けて生徒に標準語を強制しました。

明治以後、言語の問題は沖縄の文化的アイデンティティにかかわる重大な要素になりました。琉球語と日本語が姉妹関係にあり、琉球文化が日本文化の一部をなすという学問的な定説を余所に、政府の政策のレベルでも民衆の意識のレベルでも、言語の問題は常に沖縄のアイデンティティを揺さぶる疎外要因でした。政府レベルでは、太平洋戦争まで国粹的な立場から沖縄と本土との間に存する言語的・文化的差異を抹殺して沖縄を本土に同化する政策がとられました。そのため、琉球語は虐げられ、沖縄文化の特色は蔑まれました。

政府レベルでの沖縄アイデンティティへの侵害は、中央の一部識者の批判を招き、昭和15年1月に沖縄を訪れた柳宗悦が代表する日本民芸協会同人と沖縄県学務課との間にいわゆる「方言論争」を惹き起こしました。この論争は、舞台を東京に移して清水幾太郎や萩原朔太郎を含む中央の知識人、文化人多数を巻き込んだ一大論争に発展し、延々翌年の4月まで続きました。しかし、国際情勢が風雲急をうけていた昭和16年、方言問題は間もなく忘れ去られてしまいました。

民衆のレベルでも、言語の問題は本土の人たちの意識の中に違和感をもたらす最大の要因でした。本土人との日常のやりとりで沖縄人の話す言葉が分からなかったり、訛がひどかったりしたために、沖縄人を異族視して差別する風潮がうまれました。このような状況の中で、沖縄人の意識は自文化に対して肯定と否定の狭間で揺れ、時には卑屈なまでに沖縄文化を卑下し、また時には異常なナルシスト的心情に陥りました。標準語励行を推進した県庁の官吏の一部や運動に積極的に協力した学校の教師は、とりもなおさず沖縄人でありましたし、また一方、沖縄の文化的遺産の保存や沖縄芸能の発展に尽力したのも他ならぬ沖縄人であったのです。

自文化に対する微妙な意識の在り方は、文芸家にも及んでいました。文芸家は直接文化に関わっているだけに、一般の人びとよりも寧ろ敏感であるといえるのかも知れません。殊に、日々沖縄に対する偏見に曝された本土在住者の意識は極めて微妙だったと思われます。その微妙な

心情を表現した詩に、山之口貌の「会話」があります。注の No.9 をご覧ください。

出身地を聞く女に主人公は言い淀み、自嘲的に故郷に想念を馳せ、世間の偏見に反発しながら、とうとう最後まで「沖縄」を口にしないで終わります。この詩は昭和初期の作品ですが、この詩の背景にある差別状況が戦後の昭和40年代に至っても本土在住の沖縄人の心に暗い影を落としていることが、『朝日新聞』へ投稿された無名の詩人による次の作品によって分かります。これは注の No. 10 をご覧ください。

このように自らのアイデンティティに悩みながら、しかも官・民双方からの圧力にもかかわらず、沖縄戦までの県民は依然として方言をしゃべり続けていました。ところが、太平洋戦争が終わると状況は一変します。あれほど強力な政府の言語政策にもかかわらず徐々に標準語化のプロセスが、強制が全くなくなった戦後の沖縄で、民衆の自発的な選択として短期間で達成されたのです。これには様々な要因があり、その詳述は割愛せざるをえませんが、要するに、アイルランドの場合と同様、人々が生活の現実への対応において方言では間に合わなくなったと判断したことが主たる原因であるといえるでしょう。戦後の沖縄の人々の生活の在り方は、もはや方言だけで維持していくことは不可能になったのです。ちょうどアイルランド人が英国型の現代物質文化を選択したとき意識的に英語慣用に踏み切ったように、沖縄人も本土型の生活態度を身につけるようになったとき方言を捨てて標準語に乗り換えたのです。この言語文化の大転換がほぼ半世紀で達成された点でも、アイルランドと沖縄は似通っています。

## 7

沖縄の言語状況について、文学との関連で、早くも大正初期に注目すべき発言をした人たちがいます。伊波普猷・月城兄弟です。「沖縄学の父」といわれるほどに沖縄について先駆的な仕事をした普猷は、日本語による沖縄文学の可能性について極めて悲観的な意見を述べています。彼は、沖縄と日本の間には「言語の七島灘」があり、この難所を渡らないかぎりアイルランドが英国文壇に送ったイエイツやショウのような鬼才を日本文壇に送ることはできない、と指摘しました。

普猷の実弟月城はより楽観的で、普段はゲール語を話しながら、英語によって現代英文学を代表する名作を書いたアイルランド作家のように、沖縄作家も日本語によって「南日本を代表する芸術」を創造することができると主張しました。兄弟ともにアイルランド作家を手本にあげているのは興味深いことですが、二人とも挙げたアイルランド作家の言語的背景について思い違いをしているのは残念なことです。彼らが手本としてあげたアイルランド作家は、いずれも英語を母国語とするアングロ・アイリッシュであり、彼らにとって「言語のアイリッシュ海」は存在しなかったのです。

伊波兄弟の沖縄の文化と文学についての認識は、その後の沖縄の文化的プロセスからかなり隔たりがあります。普猷の悲観的な予言を嘲笑するかのようには、沖縄の作家たちは続々と言語の七島灘を渡り、すでに4人の芥川賞受賞者が出るに至りました。また月城の理想を置き去り

にして、作家たちが日常日本語で生活するようになったばかりか、彼らが表現すべき沖縄のアイデンティティそのものが急速に失われる状況になってきたのです。

自国語の喪失は、文化的アイデンティティの喪失につながります。現実の七島灘は往来が可能ですが、言語の七島灘には往路しかなく、渡ってしまえば再び戻ることは最早不可能なのです。こうした事態に気づき始めた沖縄知識人の間で、近年、土着主義が湧き起こってきました。作家たちも沖縄の風俗や伝統的な精神世界をテーマに取り上げる傾向を強めています。芥川賞受賞第1号の大城立裕を初め、他の3人の受賞者および2人の候補者はいずれも沖縄の精神世界をテーマにして注目されました。先ほど取り上げました2篇の詩に見られるような自らのアイデンティティを消し去ろうとする心情は、昨今の沖縄の作家や詩人には全くみられなくなりました。沖縄のアイデンティティの消滅が危惧されるようになった今日、沖縄の作家や詩人は、逆に沖縄のアイデンティティにこだわり、本土に対して一定の距離をおこうとする姿勢すら見せるようになったのです。

たとえば、沖縄在住の詩人、高良勉は「越える」<sup>(11)</sup>と題する詩で、目を本土と逆の南の方へ向けています。山之口獺が忘却の彼方へ押しやろうとした南方に出自を求めているのです。この作品は、「滅びた村跡の石垣と一本の共同井戸」に象徴される沖縄の神話の喪失を嘆く言葉で始まります。「神話を謡う少女がいない／たった一本の水脈が／どのように枯れたか... ふつふつと湧くニーリ神謡は聞こえない」と嘆く主人公は、かつてパスポートを持って本土へ渡ったころ、無国籍人として税関で、日本人、沖縄人、アメリカ人の中から選択を迫られた自分と、沖縄の最南端の小浜島や波照間島の更に先の海を目指す自分とをだぶらせています。そして、沖縄文化のルーツを求めて、「枯れゆく水脈の源 南へ南へたどる」自分の旅立ちを、古い「日本－琉球」の二項対立の枠組から解き放つ新しい探求として明示し、「落とし、越え、流せ／身体にまわりつく／＜日本－琉球＞の錆びた観念／いま始まるか <わが神話＞への旅」と宣言しているのです。

この詩に見られる宗主国との関係から生じる文化的な呪縛からの解放は、アイルランドにおいては1世紀前に起こった「アイリッシュ・ルネサンス」の土着ケルト主義と軌を一にしています。イエイツらも「アングロ・アイリッシュ」の矛盾を乗り越えようと、アイルランド文化の源である「ケルトの薄明」へ旅立とうとしたのです。この旅立ちは、「アングロ」だけの超克にしか関心のなかった民衆や一部の作家には歓迎されませんでした。英国を越えた地平でのアイルランド文学の可能性をアイルランド人の間に目覚めさせ、大きな自信を生み出す役割を果たしたことは間違いありません。ショーン・オファーリンは、15歳のときアビー劇場で観た劇が自分の周りに住んでいるような人々をドラマ化しているのに驚き、目のウロコが落ちる思いであったと告白しています<sup>(12)</sup>。

沖縄の作家たちの意識が沖縄の土着に集中する傾向があるのをみますと、沖縄作家の創造的プロセスがある種のステレオタイプに嵌まってしまった観なきにしもあらずですが、見方を換えれば、ジョン・モンタギューがいう「移植された舌」で立派に歌をうたえるようになったと言えなくもありません。

最近は、「移植された舌」で沖縄を歌って中央の文壇から逆に「文学の鉦脈」という高い評価（『文学界』）を受けるようになりました。こうした沖縄文学の現状は、伊波兄弟の時代からは隔世の感があります。それは、まさにショーン・オファーリンが「アイリッシュ・ルネサンス」にもよおした感慨を再現したような感じです。

しかし、この状況は沖縄の文化的プロセスに複雑なインパクトを与えています。それは、まさに20世紀初頭のアイルランドの文化状況と似たような状況を現出させているのです。即ち、土着主義の隆盛と、知的言語としての母国語の衰微という矛盾した文化現象です。

アイルランドでは、作家たちが英語によって宗主国の文学を圧倒するような優れた文学を創造して世界的な評価を受けましたが、700年以上にわたる植民地支配でもしぶとく生きのびてきたゲール語文化は巨大な英語文化に飲み込まれてしまいました。

一方、沖縄においてはまだゲームは終わっていませんが、9回裏で10対1くらいのリードを許しているといつて過言ではないでしょう。かつてないほど沖縄の土着文化への誇りが高まってきた昨今の沖縄の人々の意識とは裏腹に、沖縄の言語文化は圧倒的な日本語文化になす術もなく飲み込まれつつあります。

申すまでもなく、アイルランド、沖縄双方における土着主義は、母国語愛好の気運を高めていることは確かです。しかし、それは概ね芸能や個人的な嗜好のレベルにとどまり、生きた慣用語として文化的プロセスを進行させる主たる動因となるまでに至っていないことは紛れもない事実です。

## 8

このように話を進めてまいりますと、アイルランドと沖縄の文化的アイデンティティの未来は暗いように見えるかもしれません。しかし、見通しはそう暗いものではないようにも思います。周縁・少数派文化のアイデンティティがグローバルな人類文化の一部として生かされる可能性が出てきたように思えるからです。

世界の文化は今大きな曲がり角にさしかかっています。この曲がり角では二つの相容れない潮流がぶつかり合っています。一つの潮流は、多文化主義の流れです。いわゆる主流文化が最近とみに勢いを失い、周縁の文化、あるいは少数派の文化が自己主張するようになってきました。この傾向は、次第に主流と周縁との対等の関係へと発展し、やがて文化の衝突や融合が起きることでしょう。

もう一つの潮流は文化の多元主義と矛盾する流れで、ハイテク・情報化時代の超民族的なスーパー・カルチャーの流れです。今日、情報やコミュニケーションの在り方は、もはや閉鎖的な旧来の「文化」の城に閉じ込められなくなっています。個々の文化の城壁を乗り越え、世界の人々が合流する巨大な人類文化の大洋が出現しつつあります。その文化の大海原に周縁文化がどのような流れをもって合流するのか、まだ確と見定めることはできませんが、アイルランドと沖縄に関していえば、自然との共生と共同体的アメニティを重視する共通の文化的特質を、

索漠とした現代の競争社会に導入して、仮想現実の無機質の映像に取り囲まれた情報化時代の生活に、自然の息吹に共鳴する精神文化の潤いを与えることができるのではないかと思うのです。

## 注

1. John Montague, *The Rough Field* (1972).

### A GRAFTED TONGUE

(Dumb,  
bloodied, the severed  
head now chokes to  
speak another tongue—

As in  
a long suppressed dream,  
some stuttering garb-  
led ordeal of my own)

An Irish  
child weeps at school  
repeating its English.  
After each mistake

The master  
gouges another mark  
on the tally stick  
hung about its neck

Like a bell  
on a cow, a hobble  
on a straying goat.  
To slur and stumble

In shame  
the altered syllables  
of your own name;  
to stray sadly home

And find  
the turf-cured width  
of your parent's hearth  
growing slowly alien:

In cabin  
and field, they still  
speak the old tongue.  
You may greet no one.

To grow  
a second tongue, as  
harsh a humiliation  
as twice to be born.

Decades later  
that child's grandchildren's  
speech stumbles over lost  
syllables of an old order.

2. Thomas Davis

LAMENT FOR THE DEATH OF EOGHAN RUADH O'NEILL

I

"Did they dare, did They dare, to slay Eoghan Ruadh O'Neill?"

"Yes, they slew with poison him, they feared to meet with steel."

"May God wither up their hearts! May their blood cease to flow!"

"May they walk in living death, who poisoned Eoghan Ruadh!"

VII

We thought you would not die — we were sure you would not go,  
And leave us in our utmost need to Cromwell's cruel blow —  
Sheep without a shepherd, when the snow shuts out the sky —  
Oh! why did you leave us, Eoghan? Why did you die?

VIII

"Soft as woman's was your voice, O'Neill! bright was your eye,

Oh! why did you leave us, Eoghan? Why did you die?

Your troubles are all over, you're at rest with God on high,

But we're slaves, and we're orphans, Eoghan! — why didst thou die?"

EASTER 1916

I have met them at close of day  
Coming with vivid faces  
From counter or desk among grey  
Eighteenth-century houses.  
I have passed with a nod of the head  
Or polite meaningless words,  
Or have lingered awhile and said  
Polite meaningless words,  
And Thought before I had done  
Of a mocking tale or a gibe  
To please a companion  
Around the fire at the club,  
Being certain that they and I  
But lived where motley is worn:  
All changed, changed utterly:  
A terrible beauty is born.

That woman's days were spent  
In ignorant good-will,  
Her nights in argument  
Until her voice grew shrill.  
What voice more sweet than hers  
When, young and beautiful,  
She rode to harriers?  
This man had kept a school  
And rode our wingèd horse;  
This other his helper and friend  
Was coming into his force;  
He might have won fame in the end,  
So sensitive his nature seemed,  
So daring and sweet his thought.  
This other man I had dreamed  
A drunken, vainglorious lout.  
He had done most bitter wrong  
To some who are near my heart,  
Yet I number him in the song;  
He, too, has resigned his part  
In the casual comedy;  
He, too, as been changed in his turn,  
Transformed utterly:  
A terrible beauty is born.

Hearts with one purpose alone  
Through summer and winter seem  
Enchanted to a stone  
To trouble the living stream.  
The horse that comes from the road,  
The rider, the birds that range  
From cloud to tumbling cloud,  
Minute by minute they change;  
A shadow of cloud on the stream  
Changes minute by minute;  
A horse-hoof slides on the brim,  
And a horse plashes within it;  
The long-legged moor-hens dive,  
And hens to moor-cocks call;  
Minute by minute they live:  
The stone's in the midst of all.

Too long a sacrifice  
Can make a stone of the heart.  
O when may it suffice?  
That is Heaven's part, our part  
To murmur name upon name,  
As a mother names her child  
When sleep at last has come  
On limbs that had run wild.  
What is it but nightfall?  
No, no, not night but death;  
Was it needless death after all?  
For England may keep faith  
For all that is done and said.  
We know their dream; enough  
To know they dreamed and are dead;  
And what if excess of love  
Bewildered them till they died?  
I write it out in a verse —  
MacDonagh and MacBride  
And Connolly and Pearse  
Now and in time to be,  
Are changed, changed utterly:  
A terrible beauty is born.

*September 25, 1916*



4. Douglas Hyde, "The Necessity for De-Anglicising Ireland" (1892).

"I wish to show you that in Anglicising ourselves wholesale we have thrown away with a light heart the best claim which we have upon the world's recognition of us as a separate nationality."

"In order to de-Anglicise ourselves we must at once arrest the decay of the language."

"...we shall become what, I fear, we are largely at present, a nation of imitators, the Japanese of western Europe, lost to the power of native initiative and alive only to second-hand assimilation."

5. W.B. Yeats, a letter to the editor of the *United Ireland*, Dec. 17, 1892.

"Let us by all means prevent the decay of the language where we can, and preserve it always among us as a learned language to be a fountain of nationality in our midst, but do not let us base upon it our hopes of nationhood. When we remember the majesty of Cuchullin and the beauty of Deirdre we should not forget that it is that majesty and that beauty which are immortal, and not the perishing tongue that first told of them."

6. W.B. Yeats, a letter to the *National Observer*, Feb. 28, 1891.

"Certainly such stories are not a criticism of life but rather an extension, thereby much more closely resembling Homer than that last phase of 'the improving book,' a social drama by Henrik Ibsen. They are an existence and not a thought, and make our world of tea-tables seem but a shabby penumbra."

7. F.S.L. Lyons, *Ireland after the Famine*, Fortuna, 1973, p. 245.

"Yet, although nothing can take from the quality of their achievement, those who made it possible were in the long run the losers in the battle of the two civilisations."

8. P.L. Henry, "Anglo-Irish and Its Irish Background," *The English Language in Ireland*, edited by Diarmaid O Muirthe, Dublin: The Mercier Press, 1977, p. 22.

"From the middle of the nineteenth century flight became the keyword, flight from the land, from the country, from the language."

9. 山之口獏, 『山之口獏詩集』, 彌生書房, 1986年。

会話

お国は? と女が言った

さて 僕の国はどこなんだか とにかく僕は煙草に火をつけるんだが 刺青と  
蛇皮線などの聯想を染めて 図案のような風俗をしているあの僕の国か!  
ずっとむこう

ずっとむこうとは? と女が言った

それはずっとむこう 日本列島の南端の一寸手前なんだが 頭上に豚をのせる  
女がいるとか 素足で歩くとかいうような 憂鬱な方角を習慣しているあの  
僕の国か!

南方

南方とは? と女が言った

南方は南方 濃藍の海に住んでいるあの常夏の地帯 龍舌蘭と梯梧と阿旦とパ  
パイヤなどの植物達が 白い季節を被って寄り添うているんだが あれは日  
本人ではないとか 日本語は通じるかなどと話し合いながら 世間の既成概  
念達が寄留するあの僕の国か!

亜熱帯

アネッタイ! と女は言った

亜熱帯なんだが 僕の女よ 眼の前に見える亜熱帯が見えないのか! この僕  
のように 日本語の通じる日本人が 即ち亜熱帯に生れた僕らなんだと僕は  
おもうんだが 酋長だの土人だの唐手だの泡盛だのの同義語でも眺めるかの  
ように 世間の偏見達が眺めるあの僕の国か!

赤道直下のあの近所

10. 無名詩人, 『朝日新聞』, 1969年11月4日。

沖縄人と日本人

埋められない距離 目に見えないカベ

悲しみと憤りと

そしてなぜか知らぬ劣等意識

ああ僕は忘れてしまいたい

南の海のあるちっぽけな島

銀座の人混みの中にまぎれ込み

僕は東京人になりすまして

すこし気どって歩いてみる

だけど電光ニュースは

今日も沖縄という文字を

あざやかにうつし出し

マナイトの上のコイのように

僕をもだえさせる

11. 高良勉、『高良勉詩集』，脈発行所，1991年。

越える

\*

風はどこから吹いて来たか  
珊瑚虫の死骸から成る島と赤土くずれ  
枯葉がカサコソ 鳴っている  
かすかにふるえているのは女郎蜘蛛  
滅びた村跡の石垣と一本の共同井戸  
深く暗い水底を覗こうとして  
身を固くしたく私>  
は吸い込まれてしまう  
神話を謡う少女がいない  
たった一本の水脈が  
どのように枯れたか  
詩う<私>などもそもそも在ったか  
傍らの青桐は何も語らない  
洗い塩と平御香と欠けた盃  
蜘蛛の巣だけを残し  
村人はどこへ消えたか  
ふつふつと湧くニール神謡は聞こえない

\*\*

船底の二等室にもぐり込み  
枯れゆく水脈の源 南へ南へたどる  
水平線の彼方に浮かんでは消える  
島影に別れ 波を越える  
マンタの群れ水面を飛ぶ  
西表礁湖ヨナラ水道へ水脈をたぐり  
小浜島 鳩間島  
船はひたすら視えない<国境>へ向かう  
かつて十九歳の夏  
東京晴海埠頭で破棄した  
パスポートの悪夢が  
無国籍人の身体の記憶をゆさぶる  
<あなたはどこの国の人ですか、  
次の中から選んで○をつけなさい。  
ア、日本人 イ、沖縄人  
ウ、アメリカ人 エ、わからない>

\*\*\*

あれから  
いくつの夜が過ぎたのだろう  
午後十時半すぎ  
壁時計の長針が  
急速に回転し始める  
帽子 くつ下 ワンピースをひろげ  
にぎやかに商談を交わす  
台湾の人々に乾杯をささげ  
空オケの歌声聞き流し  
星一つない甲板に一人立つ  
与那国島の光捜せ  
妻を捨て少女を捨て漂う 時差の中  
耳を 北風が切っていく

\*\*\*

闇の底の海の道  
幻の<国境> いま越える  
腹ちがいの兄が若き日  
故郷を捨て亡命を企だてた  
ドゥナン海峡よ  
何を思っていた  
密貿易の船団は視えない  
落とし 越え 流せ  
身体にまわりつく  
<日本 - 琉球>の錆びた観念  
いま始まるか <わが神話>への旅  
青が増す東の空  
充血した眼に  
台湾の島影が  
朝もやの中からぐんぐん  
近づいてくる

(わが神話 - ①)

12 Sean O'Failain, *The Irish*, New York: Penguin Books, 1980.

“I have recounted in my autobiography how an Abbey Theatre play lifted the cataract of my eyes at the age of fifteen. Before that I had seen nothing but plays brought to Cork ‘straight from the West End’.... This play, *Patriots* by Lenox Robinson, is not a great play; but to me it was a revealing and exciting experience, because it dealt not with adultery in St. John’s Wood or..., but with ordinary Irish peasants, small-town shopkeepers and farming folk any of whom could have been one of my uncles or aunts.... When the curtain fell in the Cork Opera House, that wet night in 1915, I was ready to explore, to respond to, for the first time to see the actuality of life in Ireland.”